HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評にこたえて
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	アジア社会研究会ニュースレター, 2008-2, 3-4
Issue Date	2008
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35594
Type	column (author version)
File Information	sakurai-8.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評にこたえて（アジア社会研究会）

北海道大学　櫻井義秀

１　本書のねらいと知見

まず、合評会の対象本として拙著を取り上げていただいた研究会の各位、また、詳細な報告と細部にわたる質問をしていただいた新見道子さんに感謝申し上げたい。3 年前に刊行した拙著『東北タイの開発と文化再編』（北海道大学図書刊行会,2005）が、東北タイの総説に関わる調査研究であれば、本書は「開発僧」に着目して、宗教と地域文化の関わりを考察した領域的な調査研究といえる。

従来の開発僧に関わる研究・論考は、数例の典型的な開発僧から大きな主題や理論を構築してきた。その結果、多様で奥行きのあるタイ上座仏教の実態を分析者の枠組みに押し込めてきたようにみえる。文化人類学や宗教研究では、わずか一例であっても典型的な事例を厚みのある記述によって深層まで掘り下げた分析をなすことが多い。しかし、そうして描かれた少数の事例が全体の事例のなかでいかなる位置にあるのかといったコンテクストが分からなければ、事例の意味は出てこない。コンテクストを理解するというのは、時代や地域的背景を描き込むことに留まらない。事例のバリエーションを示すことが何より肝心である。その上で、類型を比較検討し、それらの差異がどのような条件によって生じているのかを示してこそ、事例を全体のコンテクストに位置づけたと言える。

そこで、本研究では①典型的な開発僧と考えられた先行研究の事例と、②同じサンプリングの条件で時代・地域を変えて櫻井が集めた事例を対応させ、併せて③統制集団として、開発僧と考えられていない一般の僧侶の事例を比較検討することにした。

すなわち、本調査では①タイで四四例を集めたコンケーン大学の調査事例、②筆者が東北タイ全域で収集した開発僧の三二事例、③東北タイのカーラシン県ガマラーサイ郡において悉皆調査を行った八一ヵ寺の事例を相互に比較した。その結果、次のような知見が得られた。①NGO と協働する典型的な開発僧は、一九八〇年代、NGO が地域開発に乗り出した時期に多く、②カリスマ型･伝統型の僧侶は、一九九〇年代、タイの経済成長により庶民の布施の額が増大した。企業家や政治家が寺院ごと寄進することで徳を顕示し、結果的に寺院の余剰資金が地域開発に還流された事例が多い。しかし、③普通の僧侶も村人と互恵的な関係を維持しており、規模は小さいが様々な開発実践を行っている。

本書は東北タイの開発に従事する僧侶達をタイ社会の中に適切に位置づけるべく、東北タイの社会開発史や南部ムスリム社会との対比、公共宗教としての上座仏教の機能など多くの問題にも併せて言及しているが、新見さんが紹介されているとおりである。

２　質問と議論

新見さんや参加された先生方から受けた質問に対しては次のように答えたい。

①カーラシン県ガマラーサイ郡で行った調査の記述がもう少し詳しく叙述されてもよいのではないか。本書では巻末に調査資料として同郡の寺院及び東北タイで開発に従事している寺院、僧侶の活動をダイレクトリーとして記載しているので、そこを参照してもらえばと考えていた。また、この地域の僧侶の位置づけであるが、東北タイで開発に従事している僧侶（開発僧を自

称も他称もされない）との連続性で捉えているために、一般の僧侶という記述をしているが、実際には「開発僧」と殆ど変わらない開発実践を行う例も多い。
②開発実践が僧侶の発意によるものか、寺委員会に加わる村人や外部者のイニシアチブもあるのか。「開発僧」と呼べば呼べそうな僧侶達はやはり個性豊かで宗教的・世俗的な指導力もあり、開発のリーダー、コーディネーターの役割を果たしていたことが推測される。それに対して、郡の一般の僧侶達は元来がその村の出身者も多く、村全体の意向で寺院の運営がなされているものと考えてよい。
③アジア・アフリカ社会において地域福祉や社会福祉を考える際に、宗教と国家との関係をどう考えたらよいのか。公共宗教としての位置にある上座仏教や、村社会における寺院と村民との互酬的関係は、政治や社会生活に埋め込まれた文化宗教の要素が強く、教団や宗教運動としての活動が目立つイスラーム諸国とは対照的である。従って、タイにおいて仏教は福祉活動を直接に生み出している主体というよりも、様々な意図から布施をなすもの達と布施を受け取る層との媒介的なエージェントの側面が強いと思われる。もちろん、タンマカーイの近代適応型宗教運動、サンティアソークのコミューン運動等、メーチー・サンサニーの福祉活動等組織的な動きも見られるが、それをもってタイ仏教に大きな変化が生じているとまでは言えない。
④本書は自然環境・経済構造・政治体制・文化伝統が錯綜する複雑系ともいえる開発実践を冷静に認識することをめざしたものである。「開発僧」に期待を寄せる人々にどう受け取られるか興味深いものがあるが、何しろ大部であり高価でもあるので本書の影響力は極めて限定的なものであろう。